子どもの言語発達と異文化における多言語教育

陳　惠貞

はじめに

言語とは「人間が音声または文字を用いて思想・感情・意志などを伝達したり、理解したりするために用いる記号体系。また、それを用いる行為。」である（広辞苑）。つまり、言語は人間同士が意思伝達するのに用いる最も有効な手段と言えよう。さらに、広辞苑によると言語の 2 番目の定義として、「ある特定の集団が用いる個別の言語体系。日本語・英語の類。」としている。通常、日本人にとっての母国語は日本語であり、中国人にとっての母国語は中国語である。しかし、昔から移民というものはすでに存在し、グローバル化の著しい現代社会では、なおさらそう単純ではない。つい二十数年前から、日本での異文化理解への関心は、一般の人々の間で急速に高まってきた。円高によって、海外旅行者が急増した背景があり、鎖国的だとよく言われた日本人も外国への関心が高まり、一般の国民でも異文化とのコンタクトは肌で感じ取れるようになった。そして、ここ十数年、日本政府の提唱による特殊技能を持つ技術者・専門分野の研究者・留学生等の受け入れ体制が目立ち、一般企業や工場など職場では研修生制度を利用し低賃金の外国人労働者を増やしたこともあった。大勢の日本在住外国人こそが、日本を国際化の道に導いた最大の要因と言えよう。いまの日本は間違いなく、国際社会である。日本にいながら異文化に接するチャンスが大幅に増えたわけである。また、ビジネスの世界では、ビジネスマン自身だけでなく、その家族も異文化の洗礼を受けている。海外の短期出張や長期駐在のいずれにせよ、それなりに異文化の影響を受けている。特に長期駐在の場合は、異文化を論じる以前に、直面しているのは異国の言葉の問題である。大人はもちろんそれなりに適応していくが、心配なのは子どもたちのことであろう。異なる年齢層の子どもに異なる問題が発生する。乳幼児期・学童期・思春期のそれぞれの年齢層の子どもにとって、異なる問題と課題が存在する。

筆者はかつて「留学生」という身分で長年日本に住んできた。母国の言語と文化の薫陶をうけて、成人になってから日本にきたので、異文化の衝撃を受けながら頑張ってきたつもりである。22 年間もの長い間にわたって異文化の洗礼を受け、いまになって振り返ると大変感無量である。何故いまさらかと言われると、実は筆者にとって、日本という第 2 の故郷というものは、もう少しで母国にいた年数を越えてしまうからである。これは実に複雑な心境で、過去・現在・未来のことをいろいろと頭の中に巡らせている。これから筆者にとっては、「故郷」というものを再考する必要があるのではないかと考えている。何故かと言うと、生まれ故郷は祖国であるが、受ける影響の大きさの面から論じると、これからのことも含めて考えると、日本の方が遥かに大きいであろう。このようなことを考えながら、当時留学生仲間のことや留学生の子どもたちのことを思い出した。語学を教えている立場から、そして自分自身教育心理学者という使命感から、当時の子どもたちの言語教育

と言語発達を考えるきっかけを与えてくれた。20年もの歳月が経った今でも忘れられない一つショッキングな出来事があった。留学生仲間の2歳の子どもが、日本に来てから失語症となってしまったことだ。当時は皆学生同士で、それほどの知識もなかったことから、いまになって思えば、その2歳の幼い子を救えてやれなかったことを悔やみ、本当に可哀想なことをしてしまったと思われる。一昔（20数年前）の留学生と最近の留学生との決定的な違いは年齢の差である。近年、中国の高度な経済発展に伴い、留学する人は若者が多い。昔の中国からの留学生は公費留学生がほとんどで、２０代後半になり、結婚をしてから公費留学のチャンスを掴んで留学するケースが多かったである。その中で、更に子どもがいる人も少なくはなかったようである。国の政策として、公費で留学させるからには、学業を終えたら直ちに帰国し国に貢献してほしいという思惑があったという。国にとって、公費留学生の家族は、まさに留学生を帰国させる切り札であった。そのため、留学生の家族が出国するのはなかなか至難の業であったと言えよう。そのような国の事情と背景の中で、家庭持ちの留学生の多くは家族と数年にわたって、ばらばらになって生活することは珍しいことではなかった。筆者の留学生仲間はまさにその中の一家族であった。彼らは運良く、夫婦そろって来日したが、生まれたばかりの子を国に残さざるを得なかった。やがて2年後に、幸運なことに子どもを日本に迎えることが許された。家族はやっと一家団欒することができたわけである。しかし、その幸せも束の間、その子の両親はともに留学生なので、昼間はもちろん学業が第一である。そうすると、その子どもは保育園に預けられることになった。20年も前の日本では、外国人の存在はまだ珍しいものであり、街で外国人をみかけると「外人さん」と呼ばれる時代だった。我々東洋人は見た目的には日本人とそう違わないので、しゃべらない限り分からないかもしれない。しかし、アメリカやヨーロッパなど西洋の人はもちろん、東南アジア、特にインドやマレー系マレーシア人やフィリピン人など、日本人と外見が全然違うので、すぐに「外人さん」呼ばれされてしまう時代であった。そんな時代背景の中で、保育園の保育士さんにとっては、「外人さんの子ども」というのは外国語の壁があり、「扱いにくいもの」という戸惑いとプレッシャーがあったはずだった。そして、保育士さんが子どもの先生として、「早く園に馴染んでほしい」という願いから、「早く子どもに日本語を覚えてもらいたい」という要求を親にしたわけであった。こういった指示を受けた親として、家でも必死で子どもに日本語を詰め込もうとした。結果として、その子どもは長い間失語症になり、言語の発達は大幅に遅れ、親子共々暗闇の中でもがくような事態に墜ちいってしまった。それからというもの、親子3人は不安な日々はもちろん、わが子の「病気」を治すため転々と病院に通い渡っていた留学生夫婦の姿が我々の目には痛々しく映っていた。いまでこそ冷静に分析できるが、当時はなかなか状況の把握ができずにいた私たちであった。このケースについて、3つのポイントに分けて考えることができよう。①言語発達の面では、2歳という年齢はちょうど言語発達の転換期でもあったこと。また、②親子間のコミュニケーションや愛着の問題にも着眼しなければならないこと。さらに③初めて遭遇した異文化のカルチャー・ショックという環境や精神

の側面も考量してあげなければならなかったこと。以上３つのポイントから考えてみることにした。

１．言語発達について

人間の言語の発達について、特に子どもの言語発達について考えてみよう。人間の赤ちゃんが生まれた時に発した第一声は、「産声」と言われている泣き声である。この産声は言語ではないが、「この世に生まれてきたよ」という意志表明を表しているように感じさせる。生後間もない新生児期の赤ちゃんの発達は最初の数週間は泣き声で占められる。泣き声以外の声を発するようになると「喃語」というものが聞こえてくる。「喃語」というのは、「弱く穏やかな音による意味のない発声活動である」と定義され、生後２ヶ月ごろから始まり、7～8ヶ月が最盛期で、初語が現れる12ヶ月ごろから急速に減退してゆくようである（村田，1981）。喃語は言語の３つの機能（次の段落を参考）の中で、最大の機能である。「伝達機能」の側面から言えば「意味のない発声活動」とされているが、親子の非言語的なコミュニケーションの側面からみると大変「意味がある発声活動」だと思われる。何故かというと、また言語の習得ができていない赤ちゃんには、親とコミュニケーションをとるための手段として、喃語が十分にその役割を果たしていると考えられるからである。そして、喃語にはもう一つ大変興味深いことがある。これだけ世界中にいろいろな文化があり、言語がある中で、赤ちゃんの喃語は文化と言語の壁を乗り越え、いかにも赤ちゃんの世界共通語としてみえたので、これこそ人間にあるべき姿かもしれません。また、異文化研究や言語研究で苦労なさっている方々にとって、なんとも羨ましいことと映るであろう。

ここで、言語の３つの機能についてさらに詳しく説明しようと思う。言語の機能について一般的に、伝達機能と思考機能と行動調節機能という３つの機能があげられる（福沢，1987）。伝達機能はとりわけ言語の三大機能の中で、最大な機能をもつものとして捉えられている。言うまでもなく、言語の最大の機能は、相手に言葉を通して自分の意志を伝えることであり、そして、相手の言葉を聞き理解し、さらに言葉で返事をするというようにしてこそ会話が成り立つ。会話というのは、まるでキャッチボールのように言葉を投げかけ、それを受け止め、フィードバックとしてさらに返していくという作業である。会話を繰り返してこそコミュニケーションがとれる。相手がいるからこそ、キャッチボールができ、そしておもしろく感じられるのである。同様に、相手がいるからこそ、会話やコミュニケーションができ、そしておもしろく感じられるであろう。次に、２つ目の機能として、思考機能があげられる。独り言を発するときのことを想定すればよい。独り言は同時通訳のように、脳の中で考えていることを無意識的に言葉にして口から発する。独り言のように言いながら、行動をすることは幼児によく観察される。言葉を発することと思考していることを同時進行しているという同化現象がみられる。大人に観察されにくいのは、やはり大人には経験によって行動がパターン化された結果だと思われる。さらに、幼児には、言語を習得するには、この思考機能が欠かさない。特に概念の形成にはとりわけ重要である。例えば、大きい・小さい・速い・遅い・遠い・近いなど距離や時間や大きさ等抽象的

な概念が形成されるときに、幼児にとって理解し難い概念は、この思考機能が役に立つであろう。さらに、悲しい・苦しい・嬉しいなど感情の表し方を言葉にして表現することは、最初幼児にとっても分からないものだが、これも思考機能が概念と言葉を結びつける役割を果たしていると考えられる。

そして、「喃語」の次の段階は、「初語」という。「初語」とは、親が初めて意味のある発声として感じ取った音声パターンとされ、1 歳前後に発する。初語としてよく観察されたのは「パパ」、「ママ」、「マンマ」（食べ物）、「ワンワン」など子どもたちにとって、日常生活の中でよく触れる人や物である。一般的な言語の発達段階として、1～2 歳の段階では、子どもは言語を知り、その基本的な働きに気づく。3～4 歳の段階では、言葉で生活し始め、そのために多くの語彙を覚え、言語によるコミュニケーションが頻繁に行われ、発音はよりクリアになり、前の段階よりは聞き取りやすくなる。5～6 歳の段階は、発音はもちろん前段階よりさらにクリアになり、何よりも文字の習得によって語彙はより著しく増え、自らより多くの言葉に出会うことになる。個人差に委ねられるが、この段階は言語発達の早い子にとっては読み書きができるようになっていく画期的な時期でもあり、言語による論理的な思考の能力が育くまれる。これで乳幼児期を通して、基本的な言語基礎が出来上がり、人とコミュニケーションをとることがこの上なく楽しくなるはずである。さらに、学童期へ進んでいくと、環境や個人の努力次第で、これから先の言語の学習は更に高度化してゆき、洗練されてゆき、計り知れない言語の世界が待っている。以上のように、人間の赤ちゃんが言語を習得する際には、発達段階を踏んで上達していくわけである。

2．親子間のコミュニケーションや愛着の問題について

コミュニケーションとは、「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする。」そして、「動物個体間での、身振りや音声・匂いなどによる情報の伝達。」である(広辞苑)。コミュニケーションは、前に言及した言語機能と同じように、相手に自分の意思を伝達することが最大の機能とされている。そして、コミュニケーションと言語機能の大きな異なる点といえば、コミュニケーションの手段にあるのではなかろうか。コミュニケーションには、言語的コミュニケーション（言語と文字による伝達）と非言語的コミュニケーション（表情・感情表現や身振りなどによる伝達）に分けられる。一方的な伝達だけで、相手の反応や共鳴がなくでは、うまくコミュニケーションがとれているとはいえない。

そして、コミュニケーションの発達で、親子関係や対人関係の中で度々論じられているのは、初期段階の愛着関係である。「愛着」とは、子どもと特定の育児者とのあいだの積極的な愛情的結合をいう。乳児期によくみられる人見知りや後追いという特定の育児者への執着は愛着と深い関係にあることがよく知られている。一般的に、特定の育児者は母親を指す場合が多く、また、愛着の対象も母親が多い。が、やむをえない状況の中で、母親の代わりになる者は、愛着の対象になりうる。子どもにとって、受容的な存在であり、いつ

でも受けとめてくれる存在の特定の育児者との情緒的な結合によって、愛着関係が形成されていく。安定した愛着関係の中で、やがて子どもは対人関係やコミュニケーションの発達に繋がっていて、広がっていく。つまり、愛着関係はその後の対人関係やコミュニケーションの発達の基になるわけである。ちなみに、子どもが愛着を形成しやすい時期は、生後6ヶ月から1歳半の間と言われている。この時期の子どもはまた言語の発達が十分でないため、非言語的コミュニケーション手段をとる。例えば、大人に機嫌よく微笑んだり、愛嬌を振舞ったり、手を伸ばし「抱っこして」というポーズをとり、体の触れ合いを求めるなど、積極的に非言語的コミュニケーション手段をとることができる。また、ほしいものがあったり、みてほしいものがあったりするときに、指差行動をして、大人に知らせること、これも非言語的コミュニケーション手段である。さらに、泣いたりして何かを要求すること、一見コミュニケーションがうまくとれていないが、これもまた立派な非言語的コミュニケーション手段である。要するに、またしゃべれない子どもにしても、懸命にコミュニケーションをとろうとする強い意志があることがよく分かる。

3．異文化間コミュニケーションについて

「異文化間コミュニケーション」というのは、1960年代ごろから多人種・多民族からなるアメリカで生まれた言葉である。「異文化間コミュニケーション」という言葉は、intercultural communication （文化相互のコミュニケーション）、或いは crosscultural communication （文化を交差するコミュニケーション）の訳語である(鍋倉,1997)。人間は、生まれ育った文化と異なる文化に遭遇したとき、ある種の衝撃を受け、カルチャー・ショックを体験する。カルチャー・ショックは、これまで慣れ親しんできた言語と生活環境が、異文化においては役立たなくなるため、心理的に混乱が生じ、精神的な衝撃を感じたことである。異文化の衝撃を受け、うまく解除できないし、回避できない状況の中で、その際に感じた被拒絶感や隔絶感から精神的なバランスがくずれ、心身症的な症状を現すことがあろう。その症状として、食欲不振・不眠・心臓の不調・歯や体の痛み・異常行動などを挙げられている。

以上まとめた3つのポイントに基づいて、先ほど挙げた留学生の子どものケースを考察してみよう。まずは、留学生の子どもは生後2年間自国語で育てられた。日本に来た当時2歳という年齢で、前述1の中で、言語の発達段階ではちょうと言語の基本的な働きに気づき、これから語彙をどんどん増やし、おしゃべりを楽しむ時期であった。しかし、急に日本に来させられ、異文化の中で、その子にとって大変な環境の変化に不安があったはずである。それに加え、長い間離れ離れの親子がやっと団欒ができたものの、物理的な距離で溝のようなものがあったではないかと考えられる。つまり、愛着関係を形成されやすい時期に、母親の不在によって、子にとっては、特定の保育者は母親ではないし、愛着の対象は母親でもないことになった。来日することによって、いままでの愛着対象と別れるこ

とになり、幼い子にとっては情緒的不安定な状態になりやすかった。血の繋がりがある両親との再会は、その子どもにとっては、いままで習得した言語で両親と愛情を確かめ合えるチャンスであった。しかし、保育園の先生が早く子どもに日本語を教えて、慣れさせる好意が裏目に出た。そして、両親は家庭内でも日本語で子どもとしゃべることによって、子にとっては、異文化の中で頼りになっているものを急に失ってしまったような不安感に陥ったと思われる。せっかく、家庭でその子にとっては、いままで習得した言語が最初両親と使えたが、急に使えなくなったことが、一気にカルチャー・ショックの症状として、失語症・食欲不振・倦怠感などに陥った引き金と言えよう。今思えば、その子が味わった挫折感と無気力さは計り知れないものであった。総合的に考えると、これはまさに一つの異文化間コミュニケーションの失敗例である。まず、子どもは必ずしも喜んで自ら進んで来日したわけではないこと、次に言語発達段階において異文化・異言語の習得に不適切な時期であったこと、また、親が家庭内でも無理矢理外国語を教え込もうとしたことが考えられる。

以上のケースから、異文化間コミュニケーションにおいて、たくさんの課題が出てきた。本質的に、異文化間コミュニケーションは楽しいものであるべきである。カルチャー・ショックを受けていても、未知の世界との遭遇は本来ワクワクするものではなかろうか。異文化間コミュニケーションを通して、相手の言語をマスターし、環境を適応し、新たな世界と出会うことによって、人生そのものはより楽しくなるし、豊かになるはずである。

異文化における多言語教育

異文化間コミュニケーションの手段として、欠かせないのはやはり言語であろう。バイリンガルやトライリンガルなど多言語話者は常に羨ましがられる存在であろう。多言語を操ることによって、多くの人種とコミュニケーションをとることができ、視野が広がる。多言語を習得するには環境要因に大いに左右されるであろう。例えば、ヨーロッパのような複数の言語体系が共存しているところに生まれれば、環境に適応するため、複数の言語を同時に習得することが可能になる。そして、異文化の中で生活している人々はまさに環境の利に恵まれている。次に言及したいのは、外国人の子女の言語教育に関する現状である。

日本における在日外国人の人数は、「総務省統計局統計調査部国勢統計課審査発表係」が、2006 年 10 月 31 日に公表したところによると、「平成 17 年における我が国に在住する外国人は 1,555,505 人で、総人口の 1.22％を占めており・・・」である。国際化になった日本で、大勢の外国人が住み、外国人子女の言語教育は大きな課題を抱えている。日本はアメリカと異なり、外国人に対する在留資格の審査は大変厳しい国である。外国人の子女は現在日本に住み、もちろん日常は日本語が優位であろう。しかし、将来いつまで日本にいるかは、自分で決められないという実情は現実的に存在している。そうすると、日本

語の他に、母国語はもちろん、英語も学校教育の一環として学ばなければならない。このような多言語教育を強いられる環境の中で、多くの人はどのようにしているであろうか。外国人におかれる複雑な事情の中で、それぞれ国や家庭の事情もあり、一括では言えないものであろう。また、子どもの年齢によって、それぞれの年齢層に異なる問題点と課題があることも承知しておきたい。ここで、3つの事例をあげておき、ケース・スタディの材料とする。なお、研究方法として、「質問紙調査」と「インタビュー」であったが、今回は紙面の関係で「親へのインタビュー」のみとする。インタビューの内容は、「子どもの中国語学習の経過と経緯」と「勉強させる動機や期待」であった。

事例研究1

・小学校5年生の女の子、父親は日本人で、母親は中国人です。
・中国語の学習歴：6年間、日本に生まれ日本育ち、普段は日本語です。中国語の他、英語、二胡、塾に通っています。

5歳のときに小学校入学する前、最後のチャンスと思い、出張のついでに中国に連れ帰り、そのまま1年間中国で教育をうけさせました。最初はよく泣かれました。電話で「日本に帰りたい」と訴え、「ママは私のことが嫌いになったの？」とか、「ママは私を捨てるの？」と母親の愛情を疑い、同情をさそうような口調で訴えました。親として、子どものためと思い揺れながらも、心を鬼にして頑張ったつもりです。時には、残酷すぎると思うが、自分自身働きながら痛感したのは仕事先の厳しさです。とりわけ語学力の大切さです。仕事柄で、よく中国へ出張するが、年々の変化が目まくるしいです。特に、これから中国との関わりが深める一方、また、これから中国の発展を見込んで、やはり娘に中国語を習わせないといけないと思っています。中国にはビジネスのチャンスがいっぱいあり、いま世界中の人々が中国語を習う人が多いですよ。せっかく娘には中国人の母親を持ち、恵まれているから、習わないともったいないです。

中国で幼児園に入園させ、毎日中国語を聞ける・しゃべれる環境を作ってあげました。最初は抵抗し拒否をしたが、暫くして諦めがついたか、やがて慣れてくれました。一年後、日本に戻り、小学校に入学しました。帰ってきて、日本語を慣れるにはさすが時間はかからなかったですね。しかし、せっかく身につけた中国語を忘れてはいけないと危機感を感じたので、中国語教室を通わせることにしました。また、家では私は娘としゃべるときはすべて中国語で、娘は日本語で話しかけてくると知らないふりをして徹底しました。中国語でしゃべらないと答えないようにし、私と会話するとき、すべて中国語でと決めました。これも最初娘は反発したが、私は「また中国へ送り返すよ」と脅しました。娘は「また捨てられる」と思ったか、私の顔色をうかがいながらもやっと妥協してくれました。ただ、今は問題になっているのは、私は仕事の関係で単身赴任中です。めったに家へ帰れないが、親子の会話が減る一方です。なので、毎日電話をし、また日記を書かせて、ファックスで送ってくるようにしています。私はそれを手直しして、また送り返すというように頑張っ

ています。大変だけど、そうともしないとなかなか長続きできないと思います。中国語教室は週に一回しかないからです。娘はもう5年生、将来のことも考えて、毎日塾も通わせています。考えてみると娘も大変忙しいです。毎日学校が終わってから、仕事をしていない旦那は弁当を持って娘を迎えにゆき、弁当を食べさせてからすぐ塾へ送ってもらいます。平日は十時まで塾で過ごし、土曜日は午前中までは塾で勉強をさせています。土曜午後は習い事（英語と二胡）で、日曜午前は中国語教室でしょう。考えてみれば大変は大変ですね。でも日本のゆとり教育はどうにもならないから、学校教育に頼るとだめになりますよ。

中国語教育はこれからも続けないといけないが、またまた中国語の大事さと楽しさが娘には実感ができていないが、いつか親心が分かってくれると思います。いつか感謝される日が来ると信じています。

事例研究２：

・小学校３年生の男の子、父親と母親はともに中国人です。

・中国語の学習歴：４年間(５歳から中国での１年間を含む)、日本で生まれ日本で育ち、家では中国語で、外では日本語です。中国語の他、今はないが、近い内に英語を習わせます。

私はまたパートの仕事をやりだしたので、息子が３歳の時から保育園に通わせました。だから３歳まで、家にいたので、ずっと中国語でしゃべっていました。保育園へ行き始めてからは日本語もできるようになりました。中国語を勉強するきっかけは、息子が５歳の時に、両親が日本に遊びにきました。両親が帰国する時、息子に「おじいちゃんとおばあちゃんと一緒に遊びに帰りなさい」と言って、送り出しました。小学生になったら、もうなかなか帰れないよと言い聞かせたら、すんなり両親と一緒に帰ってくれました。なんの抵抗もなくて、あんまりにも順調なので、こっちはちょっとびっくりしましたね。きっと当時の彼にはまた「一年間」という概念がなかったし、最初から一年間向こうで過ごすつもりもなかったと思うし、そこまでの知恵はなかったと思いますよ。向こうでは幼児園に通わせました。降園後、近所の子どもたちと遊んだりして、それなりに楽しく過ごしていたようです。人懐こい性格で、適応能力もあり、すぐに慣れてくれて、全然問題はなかったです。しいて言えば、国際電話で最初の１回か２回くらい、まだ慣れていない頃に、「いつ迎えにくるの？」と聞くだけでした。後は楽しかった話ばかり聞かされて、本当に向こうの生活に馴染んでいて、満喫したようです。本音をいうと、かえって私と主人は大変寂しかったです。

一年後日本に戻ってきて、小学校に入学しました。それもすぐに慣れてくれましたね。日本で生まれ日本で育てられた期間が長いおかげかもしれません。家では基本的に中国語で話すが、最近になって、親と会話する時に日本語交じりが目立つようになってきました。中国語で表現しきれない時に、どうしても日本語で答えるようになったことは、日本語優位になりつつことに不安を感じています。

中国語教室に通わせるきっかけは友人の紹介です。日本に戻ってきたすぐに通わせました。いくら日常会話ができていても、読み書きができないと役に立たないでしょう。別に息子に期待とかはないけれども、これからはずっと日本にいられるかどうかも分かりません。将来もし国へ帰るとしたら、困らない程度でいいからと思って、勉強させようと思いました。

事例研究３：

・大学４年生の女の子(22 歳)と小学校４年生の男の子（10 歳）、父親と母親はともに中国人です。
・ 中国語の学習歴：娘は 6 歳の時に日本にきたが、生まれてからからずっと、家では中国語で、外では日本語でしゃべっています。息子は日本で生まれ日本で育ち、５歳からで、家では日本語と中国語で、外では日本語です。中国語の他、英語、囲碁、空手、水泳、書道、そろばん、公文など習っています。

最初、主人は私と娘を国に残して、留学生として一人で日本にやってきました。娘は 6 歳になってからやっと日本に来て、小学校に入学しました。当時みんな留学生同士で、親たちがお金もなく、いくつかの家族を集めて、親たちが当番制で子どもたちに中国語を教えました。娘は小学校より、毎週一回の中国語教室での勉強が楽しみだったようです。娘は６年間の小学校生活を終えてから、自分の意志で中国に帰り、中学校と高校生活を終え、アメリカに留学しました。いまは大学４年生で、もうすぐ卒業なので、そろそろ就職活動です。娘は昔から大変自立している子で、なんでも自分で考えて決め、行動するので、親としてあまり心配することがないです。アメリカへ留学することも自分で大学を決め、奨学金をもらって通っています。いままで大学生活の３年半、かなり忙しくて、なかなか中国と日本には帰れなかったです。なので、私は毎年息子を連れて会いにいきました。娘は、中国語がもちろん、英語と日本語もできるので、どんな仕事に就くかは楽しみです。

息子は娘と 12 歳も離れています。小さい時からなかなか一緒には遊ばなかったです。というより、兄弟といっても一緒に生活する時期が大変短かったです。娘は中学と高校が中国に帰ったので、夏休みとか冬休みしか家族がそろえません。私たち夫婦は日本での生活が安定してから、もう一人子どもがほしいと思った時にできた子なので、夫が大変可愛がっています。日本生まれ日本育ちなので、幼い時から保育園に通い、自然と日本語でしゃべっています。彼にとっては、日本語の方が楽で母語になっているようです。家では一応中国語で話すが、息子は日本語でしか返事してくれません。悩んでいた矢先に、友人に相談をしたら、中国語教室を紹介してくれたので、通い始めました。ちょうと息子が５歳の時でした。最初は読み書きが難しくて、あまり興味がなさそうで、ついていけなかったので大変でした。しかし、暫くしてから聞き取る力だけがあるので、好きな文章や物語があったりすると、読んだりすることもできるようになりました。中国語教室に通っているおかげで、家では中国語で親と会話ができるようになりましたよ。いままで、家族そろっ

た時、息子だけが外国人みたいだったが、いまはやがって中国語で交流できるようになりました。やっと家族らしくなりましたよ。

まとめ

以上のように３つのケースは千差万別で、それぞれの家庭事情があり、子どもへの期待と教育の仕方も異なってくる。しかし、親は子を思う気持ちは今も昔も変わらないと思われる。かつて、筆者の留学生の仲間が体験した失敗例、と最近の事例を比べてみると、現代の親の方が余裕を感じられた。今後、より多くの事例を取り入れ、そして、質問紙調査の結果を分析し、総合的に考察したいと思う次第である。

最後に、とある小学校の授業で教材として使われた「言葉はボール」という詩を引用させていただこうとし、結びとする。

「言葉はボール
ぼくからきみに
あなたからわたしに
楽しいキャッチボールができるといいな
みんなの気もちをのせていけ
言葉はボール」

というように、言葉はまさにキャッチボールのように、楽しくプレーをしながらお互いの気持ちを伝う役割を果たしている。同じ言語体系を持つもの同士はもちろん、異なる言語体系を持つものが相手を思いやる気持ちを持ちながら、お互いの意思（考え）と意志（成し遂げようとする志、より強い意図や気もち）を疎通するようにすれば、真の国際交流ができ、異文化間コミュニケーションができ、一早く国境なき平和な世界になることができように心から願ってやまない。

参考文献

1. エレン・ビアリストク＆ケンジ・ハクタ　重野　純（訳）　2000　外国語はなぜなかなか身につかないか一第二言語学習の謎を解く　新曜社
（Ellen Bialystok & Kenji Hakuta　1994　*In other words – The science and psychology of second-language acquisition*　BasicBooks, A divison of Harper Collins Publishers,Inc.）
2. 福沢　周亮　1987　子どもの言語心理　２幼児のことば　大日本図書
3. 伊佐雅子・Richiko Ikeda　2002　多文化社会と異文化コミュニケーション　三修社
4. 村田　孝次　1968　幼児の言語発達　培風館
5. 村田　孝次　1981　児童心理学入門　培風館
6. 無藤　隆　　2003　発達の理解と保育の課題　同文書院

7. 鍋倉　健悦　1997　異文化間コミュニケーション入門　丸善ライブラリー226
8. 八代京子・荒木晶子　2001　異文化コミュニケーション・ワークブック　三修社